

食嗜好および味覚感受性に対する25年間の追跡調査

○岡本洋子 田口田鶴子* 小野謙二*

(鈴峯女短大, *倉敷市立短大)

【目的】本報告では、1968年当時20歳であった女子99名を対象に25年間の年齢経過を追って食嗜好ならびに味覚感受性の推移を検討した。

【方法】同一対象群99名について、1968年(平均年齢20歳),1978年(30歳),1983年(35歳),1988年(40歳),1993年(45歳)の計5回,甘・酸・塩味を特徴とする食べ物に対する嗜好調査を行った。(回収率:70.7%(1978年),96.7%(1983年),80.8%(1988年),29.3%(1993年))1968年,1993年の2回,上記被検者のうちそれぞれ88名,26名について,ショ糖,クエン酸,塩化ナトリウムの等差濃度水溶液を検査試薬として,全口腔・上昇系列法により味覚閾値検査を行った。また比較対照として1988年に20歳の女子98名,1993年に20歳の女子98名を被検者とし,嗜好調査ならびに味覚検査を実施した。Duncan's Multiple Range Testおよび数量化3類によってデータの検定・解析を行った。

【結果】(1)追跡調査の20歳,30歳,40歳,45歳の食嗜好パターンは,(若年層)と(中年層)に分けられた。

(2)1968年に20歳の被検者群の嗜好パターンと1988年に20歳の被検者群の嗜好パターンは類似していた。

(3)1968年当時20歳であった被検者の甘・酸味閾値(平均値)と25年後の45歳になったときの閾値の間には,有意差がみられなかった。

(4)比較対照とした20歳女子の甘・酸味閾値(平均値)と追跡調査の20歳および45歳の閾値との間には,いずれも有意差は認められなかった。